



欧州の排外主義とナショナリズム
調査から見る世論の本質
中井遼・著
新泉社/3080円

ヨーロッパ右傾化の実態 データを駆使し検証する

「貧困が右傾化を引き起こす」という議論は、果たして妥当だろうか……。本書はヨーロッパでの排外主義が、むしろ経済以外の要因によって勢いついてきていることを示唆する。貧困は反移民と結びついているのか、移民に寛容だった国で「反移民感情が急速に高まるのはなぜか。そもそも排外主義は「結果」なのか、それとも「原因」か？ データ分析を用いることで読者の認識を大きく転換する「開眼の書」である。

コーカサスの紛争
ゆれ動く国家と民族
富樫耕介・著
東洋書店新社/3520円



マイナーな地域にみる 民族と国家の諸問題

カスピ海と黒海の狭間に位置し、多様な民族を内包する「文明の十字路」コーカサス。チエチエン紛争やジョージア、ロシア戦争、昨年再燃したナゴルノ・カラバフ紛争など、決して平和とは言えない地でもある。現地でフィールドワークを重ねた筆者は、紛争の歴史的経緯やイスラーム主義運動、未承認国家問題などを多角的に分析する。データの充実のみならず、筆者の実体験を織り交ぜたコラムも味わい深い。

世界中がその一挙手一投足に注目する現代中国。高層ビル群が建ち並ぶ大都市とは裏腹に、依然、貧しい農村部が国土の大部分を占める。現代中国を理解するには、「地域社会」像の理解が欠かせない。近世中国史研究の一環として、長年フィールドワークを進めてきた著者が描き出す村落のミクロな世界や、漁民の水上市界、感染症の世界は、文献だけではうかがい知れぬ中国社会の実像を知るための絶好のハンドブックである。



中国農漁村の歴史を歩く
太田出・著
京都大学学術出版会/1980円

都市の繁栄だけではない 地域に残された人々の声



国際連盟脱退後も 日本外交は共存を模索

国連による集団安全保障を志向する憲法九条と、一国との個別的な安全保障を志向する日米安保条約に支えられてきた戦後日本。では、戦前の日本外交は集団安全保障をどう捉えていたのか……。その答えを満洲事変〜日中戦争期に見出す本書は、紛争当事国として日本が集団安全保障の矛先となりかねない中、連盟脱退後も普遍的国際機構の枠組みと格闘した日本の外交官・国際法学者の姿を描き、戦後への連続と断絶を俯瞰する。

国際連盟と日本外交

集団安全保障の「再発見」
樋口真魚・著
東京大学出版会／5720円

平成の三〇年は「流動的な時代」であった、と本書は論じる。日本外交は湾岸戦争で冷戦後の新たな国際環境に翻弄され、経済的にはバブル崩壊に見舞われた。さらに固定化した五五年体制も瓦解し、政権交代が現実のものとなった。首相は目まぐるしく交代し、三〇年余の間に計一六人が登板した。本書は首相の政治的営為の観点から平成日本の歩みを振り返る。令和の日本政治を展望するマイルストーンとなる一冊。

平成の宰相たち

指導者一六人の肖像
宮城大蔵・編著
ミネルヴァ書房／3850円



進路の見えない時代に 宰相たちが目指した道

たとえ国家間の政治的・経済的な協調が難航しても、国際文化交流で補えるのではないか……。本書は、日本の公的機関が実践する国際文化交流の現場に焦点を当て、日々その可能性を追求する職員たちを追ったルポルタージュだ。難易度の高い「仕事のリアル」を追体験することで国際文化交流の視点から日本外交を垣間見ることができるとも魅力だ。本書は日本の芸術・文化を外交の手段として活用する未来を見据え、考察している。

国際文化交流を实践する 日本の文化外交を 国際協調実現のために

国際交流基金・編
白水社／2310円

